

自分の思いや考えを英語で表現し伝え合う授業づくりについて

－「話すこと」における即興性を意識した活動を通して－

田辺市立上芳養中学校
教諭 渡 口 奈 都 希

【要旨】

本研究では、中学校外国語科の「話すこと」領域において、即興で自分の思いや考えを表現し伝え合う力を育成するための授業づくりを提案する。授業の終末部に生徒同士でやり取りしたり、即興でまとまりのある話をしたりする対話的な活動を継続的に設定するとともに、対話を継続・発展させるための手立てとして R+Q Tips を作成した。

単元を通してこれらの研究内容を取り入れた授業を行った結果、生徒の発話数が増え、即興でのやり取りが継続した。また、生徒自身も実際に英語を即興で用いる活動を通して、学習した内容が身に付くという実感を得ることができた。

【キーワード】

話すこと [やり取り]・[発表]、即興性、表現する、伝え合う、
会話を継続・発展させるために必要なこと

1 研究のねらい

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説外国語編（以下、学習指導要領解説と略記）では外国語の目標として、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」(※1)を育成することが示されている。また、「理解する」、「表現する」といった単方向のコミュニケーションだけでなく、「伝え合う」という双方向のコミュニケーションも重視されている。「話すこと」は [やり取り] と [発表] という 2 つの領域に分かれ、それぞれの目標では、ともにアで「即興」という言葉が使われている(表1)。その理由として、[やり取り] については「実際のコミュニケーションの場面においては、情報や考えなどを送り手と受け手が即座にやり取りすることが多く、英文を頭の中で組み立てる時間を長く取れない」(※3)ため、[発表] については「既習の知識や技能を生かしてその場で話せるようにする必要がある」(※4)ためである。

平成 31 年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査の分類・区別集計結果(表2)から、「話すこと」に関する問題が他の領域と比較して正答率が低いことがわかった。同調査報告書では、「情報や考えなどを即興でやり取りしたり、相手の発話の内容を踏まえて、それに関連した質問や意見を述べたりすることに課題がある。」(※6)と示されており、指導改善のポイントとして「情報や考えなどを即興で伝え合う指導の充実」(※7)について述べられ

表 1 中学校外国語科領域別の目標(※2)
(一部抜粋・下線筆者)

話すこと [やり取り]	ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする。
話すこと [発表]	ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようにする。

表 2 全国学力・学習状況調査 分類・区別集計結果(※5)(一部抜粋)

区分	平均正答率(%)
聞くこと	68.3
読むこと	56.2
書くこと	46.4
話すこと(参考値)(注1)	30.8

ている。

これらの視点で、これまでの筆者の授業実践を振り返ると、課題として①自分の思いや考えを英語で伝え合う場面が継続的に設定できていなかったこと、②やり取りや発表において即興性に重点を置いた活動にできていなかったことが挙げられる。

以上のことから、「話すこと」領域における即興性を意識した活動を通して、生徒が、自分の思いや考えを英語で表現し伝え合う授業づくりについて、研究を進めることとした。

2 研究の方法

(1) 即興で自分の思いや考えを表現し伝え合う授業構想

田村(2015)は、「知識や技能を覚えるだけでなく『活用』していくと、バラバラだった個別の知識や技能が関連付けられてネットワーク化され、記憶に残りやすい」(※8)と述べている。学習指導要領解説でも、「外国語の学習においては、語彙や文法等の個別の知識がどれだけ身に付いたかに主眼が置かれるのではなく、児童生徒の学びの過程全体を通じて、知識・技能が、実際のコミュニケーションにおいて活用され、思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて獲得され、学習内容の理解が深まるなど、資質・能力が相互に関係し合いながら育成されることが必要である」(※9)と述べられている。そこで、授業で得た知識や技能を活用するために、終末部に対話的な活動を継続的に設定する授業を構想する(図1)。終末部では、表3の Student-Student Interaction(以下、SSI と略記)活動、On the Spot(以下、OS と略記)活動のいずれかを継続的に設定し、これまでに学習した既習事項や、その時間に学習した内容を繰り返し活用する機会を設ける。これらの活動を行う際は、即興で自分の思いや考えを表現し伝え合うための目的や場面、状況等を意識して課題を設定する。また、話すための原稿を事前に用意してその内容を覚えたり、話せるように練習したりするなどの準備時間を取ることなく、不適切な間を置かずに関手と事実や意見、気持ちなどを伝え合う。

授業の終末部で、これらの対話的な活動を行うために、導入部ではSmall Talk等の短時間の帯活動で対話的な活動を行い、展開部では新出表現等を使い、自分の思いや考えを伝えるための練習や、教科書本文の内容理解等を行う。授業・単元を通して、生徒が実際のコミュニケーションにおいて、思考・判断・表現する機会を確保する。

(2) 対話における R+Q Tips (Reaction+Question のコツ) の活用

「話すこと」においては、話し手と聞き手の役割を交互に繰り返す双方向でのコミュニケーションの機会が多く、やり取りを行う際には、相手の発話に応じたり、それに関連した質問をしたり、意見を述べたりして、互いに協力して対話を継続・発展させる必要がある。そのため、学習指導要領解説で示されている「会話を継続・発展させるために必要なこと」を参考にし、R+Q Tipsを作成した(図2)。話し手に対して聞き手がReaction(反応)することで、話に興味をもっていることや、話を聞いているという意味を表すことができる。聞き手がQuestion(質問)することでやり取りが途切れず、話し手がそれに答えることに

	第1時	第2時	...	単元末
導入	Small Talk, Interactive Teacher Talk 等			
展開	・新出表現等を使い、自分の思いや考えを伝えるための練習 ・教科書本文に関するQ&A等による内容理解 等			
終末	即興で自分の思いや考えを表現し伝え合う対話的な活動			

図1 単元・授業構想のイメージ図

表3 終末部の対話的な活動

SSI (Student-Student Interaction) 活動	生徒同士のペアにおいて、身近な話題の中で即興で自分の思いや考えを伝え合い、やり取りするもの。 ※相手を変えながら1分程度でやり取りを行う。Small Talkもその一例である。
OS (On the Spot) 活動	あるテーマについて話し手が3文程度のまとまりのある話をする。話した後に質問し合ったり、話した内容について聞き手が感想や意見を述べたりする。 ※on the spotとは、「即座に、その場で」という意味である。即興での活動という意味を込めて名称を設定した。

より、やり取りが豊かになっていく。

授業全体で R+Q Tips を活用することで、やり取りを継続・発展させ、自分の思いや考えを伝え合うことができる考える。

① 相手に聞き返したり確かめたりする。 ② 相づちを打ったり、つなぎ言葉を用いたりする。 ③ 相手の答えを受けて、自分のことを伝える。 ④ 相手の答えや自分のことについて伝えたことに「関連する質問」を付け加える。 (※10) (一部抜粋して整理)	➔	 Reaction	① 聞き返す	Pardon? / You mean ..., right?
			① 確かめる(リポート)	(例) A: I like tennis very much. B: You like tennis very much.
			② 相づち	Me, too. / I see. / I think so, too. / Really? / That's a good idea. Wow. / I didn't know that. That's nice. / I understand. / It's very (good / sad / nice).
			③ つなぎ言葉	Well ... / Let's see, / Let me see. / I mean, / You know, ...
			+	
		 Question	質問	Are you ~? / Is it ~? / Do you ~? / Does ~? How about you? / What kind of ...? / What's your favorite ...? What / When / Where / Who / Why / Which / Whose / How

図2 会話を継続・発展させるために必要なこと(左)を参考に作成した R+Q Tips (右)

3 所属校における授業研究

(1) 即興で自分の思いや考えを表現し伝え合う単元・授業構想

所属校の第2学年(13名)を対象に、東京書籍 NEW HORIZON 2 Unit 5 Universal Design で単元計画(表4)を作成し、授業研究を行った。単元の指導は全8時間と設定し、R+Q Tips を授業・単元を通して活用した。

表4 単元計画

単元目標 □ある条件で何をするかを伝え合うことができる。/自分の考えとその理由を伝え合うことができる。 /どんなときに何をするかを伝え合うことができる。 □身近な話題についての自分の意見や、その理由を伝え合うことができる。				
時	パート名	■本時のねらい	SSI・OS 終末部の対話的な活動	R+Q
1	Starting Out	■接続詞 if の形・意味・用法に関する知識を身に付け、ある条件で何をするかを伝え合うために、相手が提示する条件を理解したり、自分の条件を相手に伝えたりする。	SSI If it's rainy this weekend, ...	
2	Dialog	■同上	OS If Rosie and her friend like Japanese food, I will recommend ...	
3		■接続詞 that の形・意味・用法に関する知識を身に付け、考えたことや知っていることを伝え合うために、考えや事実などを理解したり表現したりする。	OS Let's introduce our favorite places in Wakayama!	
4	Read and Think 1	■接続詞 when の形・意味・用法に関する知識を身に付け、いつするか、どうしたらするかを伝え合うために、時や条件について、伝え合う。	OS I am happy when ...	
5	Think 1	■同上	SSI When I was ..., ~.	
6	Read and Think 2	■接続詞 because の形・意味・用法に関する知識を身に付け、好きなものや何かをする理由などを伝え合う。	OS What do you want for Kamihaya?	
7	Think 2	■同上	SSI Where do you want to go and why?	
8	Activity 1, 2	■ニュースを聞いて、概要や要点を聞き取る。 ■身近な話題について、自分の意見とその理由を述べる。	OS What is a good point of Kamihaya JHS?	

自分の思いや考えを表現し伝え合う力を高めることを重視した授業の具体として、第7時の授業(表5)を取り上げ、説明する。まず、授業構想について述べる。導入部で前時に学習した接続詞becauseの想起のために、「学校の中でお気に入りの場所を紹介しよう」をテーマに、Small Talkを行った。展開部では、教科書本文の内容理解をQ&A形式で行い、音読等の練習では、becauseの表現方法や、その他の文構造の理解や定着を図った。終末部の対話的な活動では、目的や場面、状況等として、行きたい場所とその理由等をペアで伝え合い、やり取りするSSI活動を行った。指導の際は、指導者の話や、指導者と生徒とのや

り取りを例として見せた。生徒にとって効果的なインプットにするために、既習の言語材料を使用しながら発話の速度や明瞭さを調整するとともに、繰り返したり具体的な例を提示したりするなどの工夫をした。また、活動を行う度にうまく表現できなかったことを生徒にたずね、それを全体で共有し、次の活動につなげた。反応の仕方や疑問文の表現方法、文構造の理解を促進させると共に、英語を苦手とする生徒への手立てにした。

表5 第7時の授業展開

本時の目標		自分が行きたい場所とその理由について伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができる。	
課程	時間	学習活動	指導上の留意点等(□手立て)
導入	5	<ul style="list-style-type: none"> ・ Greeting ・ Small Talk “What is your favorite place in Kamihaya JHS?” 	<ul style="list-style-type: none"> □ R+Q Tips □ 数名の生徒とのやり取りで Small Talk の例を示し、生徒同士の Small Talk につなげる。 例：I like play ground because I like to play baseball.
展開	5	Today's Goal : “Where do you want to go and why?” 「自分が行きたい場所とその理由を伝えよう。」	
	5	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新出語句の練習をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本時の目標を板書し、学習の見通しをもたせる。
	15	<ul style="list-style-type: none"> ・ Q&A を行う。 教科書 P.74 の本文の音声聞きながら、教科書本文を見て、Question の答えに線を引く。 Q1. Can we find universal design products around us? Q2. What do many public places use these days? ・ 答え合わせをする。 ・ 本文の音読練習をして、適語補充をする。 ・ ペアで教科書 P.75 基本練習を口頭で行う。 1. John took the medicine because he had a headache. 2. Yuji was happy because he won first place. 3. The girls couldn't play tennis because it rained. 	<ul style="list-style-type: none"> ・ Question を与えて、教科書 P.74 の本文の音声を聞かせ、答えの部分に線を引かせる。 □ 動詞や新出語句を空欄にし、語句や文の流れを理解しているか確認する。 □ 例を示す。
終末	15	<ul style="list-style-type: none"> ・ SSI 活動 “Where do you want to go and why?” 「自分が行きたい場所とその理由を伝えよう。」 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 本時の目標が達成されているか見取る場面 □ R+Q Tips □ 指導者の話を例で示す。 例：I want to go to Okinawa because I want to swim. ・ 3ターン行わせる。 □ 1ターン毎に、うまく表現できなかったことを生徒にたずね、それを全体で共有し、次の活動につなげる。 □ やり取りが継続していないペアについて、指導者もやり取りに参加し、表現等の例を聞かせる。
	5	<ul style="list-style-type: none"> ・ 発表を行う。 ・ 振り返りシートに自己評価等を記入する。 	

(2) 対話における R+Q Tips の活用

授業研究前の授業での様子や、授業研究第1時での生徒同士のやり取りの中で、Reaction について難しさを感じている様子が見られた。そのため毎時間、授業のはじめに、R+Q Tips のどの Reaction を意識するか、目標を設定し、段階的に表現の定着を図った。単元の前半では、R+Q Tips を教室前方のホワイトボードに掲示したが、後半では掲示せずに授業を行った。

(1)(2)の手立ての他、授業研究前後の生徒の変容を見取るために、授業研究の前後には、「話すこと」に関する実態把握テスト(以下、実態把握テストと略記)を行った。問題については、平成30年度に行われた英語予備調査、平成31年度(令和元年度)全国学力・学習状況調査の「話すこと」問題等を参考に作成し(表6)、指導者が評価を行った。出題

の趣旨は事前と事後で共通としたが、異なる問題内容で実施した。問題3 **1**のみ、事前・事後共通問題として実施した。

4 成果と課題

2 研究の方法で示した2つの研究内容について、事前・事後で行ったアンケートの回答結果及び実態把握テストでの生徒の発話記録、生徒の振り返りシートの記述や筆者の見取り等から、成果と課題を述べる。

(1) 即興で自分の思いや考えを表現し伝え合う授業構想

生徒に対するアンケートの項目「習った英語表現を、実際に使うことを通して身に付けられたと思う」で、肯定的な回答をした生徒が2名から9名に増え、69.2%になった(図3)。肯定的な回答をした生徒に対して、どの活動を通して力が身に付いたと思うか、複数回答可として回答を求めたところ、対話的な活動3, 5, 9で回答数の増加が見られた(表7)。生徒の感想には、「人と話すことで覚えることもできるのだと思った。」という記述等が見られ、既習表現やその時間の学習内容が身に付くということを生徒自身が実感していることが分かった。

また、終末部の活動について、授業後の振り返りシートでB評価は「自分の考えを伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができた。」とし、A評価はそれに「3秒以上の間を開けずに」という条件を加え、自己評価させた。A評価を3ポイント、B評価を2ポイント、C評価を1ポイントとし、毎時間の平均値を出したところ、単元後半に向けて平均値が上昇した(表8)。また、単元終末には全ての生徒がB評価以上に到達することができた。授業を重ねるごとに、発話数が増え、自分の思いや考えを英語で表現し伝え合うことができるようになった生徒の変容を見取ることができた。

課題は、終末部での対話的な活動に向けて、導入部と展開部からのつながりを、生徒に十分に意識させながら取り組ませることができなかった授業があったことである。第2時を例に挙げる(図4)。導入部のSmall Talkと終末部のOS活動では、食べ物を紹介するというテーマが共通しており、終末部では、前時に学習した接続詞ifや、本時の展開部で扱う教科書の対話文で学習する“I think (that) ….”を活用することを意図して活動を設定した。しかし、対話文内に接続詞ifが含まれておらず、また、“I think (that) ….”を使用しなくても、自分の思いや考

表6 実態把握テストの問題

問題	出題の趣旨
1	聞いて把握した内容について、やり取りすることができるかどうかをみる
2	与えられたテーマについて考えを整理し、まとまりのある内容を話すことができるかどうかをみる
3	与えられたテーマについて、指導者と英語でやり取りすることができるかどうかをみる 1 事前・事後共通問題「先週末したこと」 2 事後のみの問題「冬休みの予定」

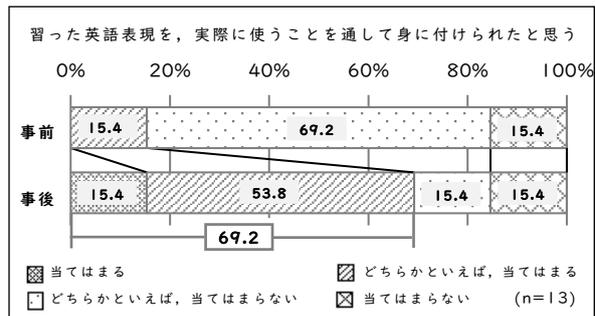


図3 事前・事後アンケート比較の一部

表7 肯定的な回答をした生徒への追加項目「どの活動を通して身に付いたと思いますか」に関する回答(複数回答可)

活動	事前 (n=2)	事後 (n=9)
1 外国のことについて学ぶこと	0	2
2 日本語と英語の違いを知ること	0	2
3 英語で友達と会話すること	2	7
4 英語の発音を練習すること	1	3
5 英語で友達や先生などの人の意見を聞くこと	2	6
6 英語の文を読むこと	2	4
7 英語で外国人の先生と会話すること	0	2
8 英語で文を書くこと	1	3
9 英語で自分の事や意見を言うこと	0	4
10 その他	0	0
回答総数	8	33

表8 振り返りシートの自己評価より(n=13)

時	A	B	C	平均値
1	0	11	2	1.8
2	2	10	1	2.1
3	1	12	0	2.1
4	3	10	0	2.2
5	1	11	1	2.0
6	2	11	0	2.2
7	4	9	0	2.3
8	4	9	0	2.3

えを伝えることができるため、展開部での学習の関連を生徒に感じさせるには十分な活動とならなかった。もう一つの課題は、終末部の対話的な活動を設定する際は、目的や場面、状況等が漠然としていたり、例えば「昔の出来事について」など、生徒にとってあまり興味のない事柄を取り上げたりすると、生徒が自分の思いや考えを話しにくそうにしている場面が見られたことである。

(2) 対話における R+Q Tips の活用

実態把握テスト問題3での生徒の発話内での R+Q Tips を Reaction と Question に分けて使用回数を数えたところ(表9)、事後では両者共に使用回数が増加したことが分かった。事前・事後共通の問題3 ①「先週末何をしたか生徒がたずね、やり取りを続ける」における生徒 A, B の2名の発話記録(図5)を見ると、共に事前は沈黙が長く、発話数も少なかったが、事後では沈黙が短くなり、Reaction をしたり、疑問詞を用いた文でたずねたりすることができるようになり、発話数が増えた。加えて、生徒 B の発話内では“What else did you do last weekend?”のように、授業内で繰り返し共有した表現も見られた。



図4 第2時における活動設定の趣旨

表9 実態把握テスト問題3の生徒発話内での R+Q Tips の回数(n=13)

R+Q Tips	事前	事後	
	①	①	②
Reaction	15	30	40
Question	14	44	30

問題3 ① (対話形式)
週末 (last weekend) 何をしたか、英語で尋ね、やり取りを継続させてください。

生徒 A
<事前>
S: What doing last weekend? (Q)
T: Last weekend, I played tennis.
S: (沈黙 7 秒) What ... ? (Q) (沈黙 3 秒)
T: I like tennis very much.
S: (沈黙 6 秒) Me, too. (R②) (沈黙 41 秒)

↓

<事後>
S: Did you do last weekend? (Q)
T: Last weekend, I played tennis.
S: You played tennis. (R①)
Do you like tennis? (Q)
T: Yes, I do.
S: (沈黙 6 秒)
Which do you play, koshiki or nanshiki? (Q)
T: I play soft tennis.
S: You play soft tennis. (R①) Me, too. (R②)
(沈黙 9 秒) Your racket is ... what your racket color? (Q)
T: My racket is red.
S: Do you like red? (Q)
T: Yes, I do.
S: (沈黙 5 秒) How about pink? (Q)
T: I like pink, too.

Tは指導者、Sは生徒、___はR、___はQを示す
※丸数字はの R+Q Tips のリアクションの種類を示す

生徒 B
<事前>
S: What did you do last weekend? (Q)
T: Last weekend, I played tennis.
S: (沈黙 3 秒) Me, too. (R②)
(沈黙 5 秒) How long play ... tennis? (Q)
T: I have played tennis for 10 years.
S: (沈黙 42 秒)
T: How about you?
S: I played 1 year and 5 months. (R③)

↓

<事後>
S: What did you do last weekend? (Q)
T: Last weekend, I played tennis.
S: Me, too. (R②) (沈黙 7 秒) How long play tennis last weekend? (Q)
T: I played tennis for 2 hours.
S: (沈黙 4 秒) Who is ... who do you like tennis player? (Q)
T: I like Osaka Naomi.
S: I like Osaka Naomi, too. (R③) (沈黙 7 秒)
What else did you do last weekend? (Q)
T: I watched a movie.
S: What watch movie? (Q)
T: I watched Aladdin.
S: I don't watch Aladdin. (R③)
T: I see.
S: I want to Aladdin. (R③)

図5 実態把握テストの事前・事後共通問題3 ①における生徒 A・B の発話記録

生徒 C の問題 3 [2] の発話記録 (図 6) を見ると初めて見る問題にも関わらず、沈黙が少なく、多くの Reaction をすることができていた。これらの生徒の発話記録や、会話の様子から、R+Q Tips を活用することでやり取りを継続・発展させ、豊かなものにすることができたと考える。

(1)(2) の取組を通して、生徒が得た知識や技能を、授業内で活用し、思考・判断・表現することを繰り返すことで学習内容を理解させ、深めることができた。実態把握テストの結果 (図 7) から、問題 2, 3 で、事前は C 評価や B 評価であった生徒の大部分が、事後には B 評価や A 評価に達することができた。また、相手の話に興味をもっていること、理解しようとしていることの意味の表れとして、アイコンタクト等をしながらやり取りをすることもできていた。アンケートの回答内容や振り返りシートでの自己評価からも肯定的な変化が見られ、生徒の感想を見ても、「たくさんの人と色々なテーマについて英語で話すことができて楽しかった。お題が難しかったこともあったけど、前よりもいろいろ英語で話せるようになった。」や「少しは英語で会話することに幅が広がったと思いました。もっとたくさん話せるようになりたいとも思うことができてよかったです。」といった記述等が見られ、「話すこと」への自信や意欲につながったと考えられる。

これらの結果からも、「話すこと」における即興性を意識した、2つの研究内容に取り組むことにより、生徒が自分の思いや考えを英語で表現し伝え合う力を高めることができたと考えられる。

5 今後に向けて

実態把握テストの結果 (図 7) では、問題 1 での変容があまり見られなかった。これは聞いた英語が十分に理解できなかったために、何をすべきか分からなかったり、反応や質問ができなかったりしたためであると考えられる。実際のコミュニケーションの場面においては、「表現する」「伝え合う」だけではなく、「理解する」という要素も欠かせない。学習指導要領解説にも、「聞いたり読んだりする受容面での英語使用を受け、それを話したり書いたりする発信面での活動へと結び付けていき、五つの領域が密接に結び付いた英語使用ができるような力を育成する必要がある」(※11) と示されている。このことから、複数の領域を統合的に関連付けた指導について、今後より一層重視することが必要であると考えられる。

今後も、学んだ知識や技能を活用できるよう、自分の思いや考えを表現し伝え合う場面を継続的に設定する授業を構想していく。また、「話すこと」に限らず言語活動を行う際は、実際のコミュニケーションの場面を想定し、目的や場面、状況等を意識し、生徒が思考・判断・表現することを繰り返す授業づくりを継続して行っていきたい。その際は、生徒が

問題 3 [2] (対話形式)

この冬休み (this winter vacation) どこへ行きたいか、英語で尋ね、やり取りを継続させてください。

生徒 C

<事後のみ>

S : What do you go to this winter vacation? (Q)

T : I want to go to Tokyo. (R①)

S : Oh, you want to Tokyo. (R①)

Me, too. (R②) Why? (Q)

T : Because I want to go to Asakusa. (R②)

S : You go Asakusa. (R①) Very nice. (R②)

I go to Osaka. (R③)

(沈黙 14 秒) ... go shopping. (R③)

(沈黙 5 秒) How about you? (Q)

T : I want to eat a lot of delicious food. (R③)

S : Delicious food. (R①) Me, too. (R②)

T は指導者, S は生徒を示す
 〃 は R, 〃 は Q を示す
 ※丸数字はの R+Q Tips のリアクションの種類を示す

図 6 実態把握テスト問題 3 [2]における生徒 C の発話記録

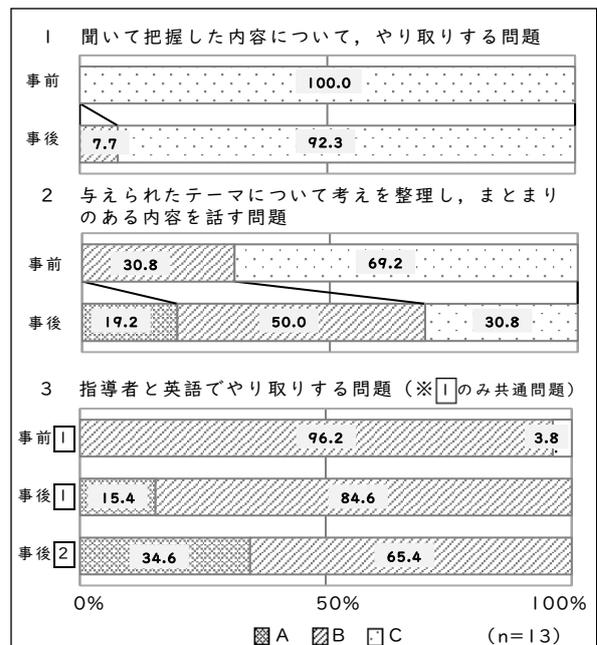


図 7 事前・事後の実態把握テストの結果

関心のある事柄を取り上げ、目的や場面、状況等を明確にし、生徒が「話したい」と思えるテーマを設定する。加えて、R+Q Tips等の活用により、話し手と聞き手が互いに協力しながら対話を継続・発展させ、豊かになる工夫をしていく。

<注釈>

注1 「話すこと」に関する問題については、設置管理者が各学校のICT環境の整備状況を把握し、各学校の状況を十分踏まえた上で検討し、設置管理者の判断により学校単位で「話すこと」に関する問題を実施しない場合があるため、参考値として扱われている。

<引用文献>

- ※1 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』開隆堂 p.10（2018）
- ※2 同上資料 p.22, 24
- ※3 同上資料 p.22
- ※4 同上資料 p.25
- ※5 文部科学省 国立教育政策研究所『平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査報告書』 p.10, 12（2019）
- ※6 同上資料 p.8
- ※7 同上資料 p.9
- ※8 田村学『授業を磨く』東洋館出版社 p.104（2015）
- ※9 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』開隆堂 p.7（2018）
- ※10 同上資料 p.61
- ※11 同上資料 p.53

<参考文献>

- ・池谷裕二『脳には妙なクセがある』扶桑社（2013）
- ・伊東治己『アウトプット重視の英語授業』教育出版（2008）
- ・上山晋平『はじめてでもすぐ実践できる！中学・高校 英語スピーキング指導』学陽書房（2018）
- ・白井恭弘『英語教師のための第二言語習得論入門』大修館書店（2012）
- ・鈴木淳子「即興で話すこと [やり取り] の力を育成する指導の在り方（第一年次）ーコミュニケーション・ストラテジーを取り入れた学習活動の工夫ー」福島県教育センター『平成30年度研究紀要』 pp.55～57（2019）
- ・田中武夫・田中知聡『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』大修館書店（2003）
- ・田中武夫・田中知聡『主体的・対話的で深い学びを実現する！英語授業の発問づくり』明治図書（2018）
- ・田村岳充「いまから始める『即興のやり取り』への第一歩」『英語教育2018年12月号 第67巻 第10号』大修館書店（2018）
- ・田村学『深い学び』東洋館出版社（2018）
- ・道面和枝『中2で楽しく会話がつづく！「2分間チャット」指導の基礎・基本』明治図書（2009）
- ・西林慶武『中学英語4技能ペア&グループワーク』学陽書房（2019）